

2020.07.11 福岡県・許斐山 (このみやま)271mの

キノガサタケ、コクラン、タマゴタケ

(吉原(よしはら)登山口～許斐山(このみやま)271m～尾立山～千歩山～八並東登山口～吉原(よしはら)登山口の周回コース)



許斐山登山道のごあんない
Konomiyama Hiking Course Guide Map

許斐山登山道周辺地図



凡例

INDEX

現在地

登山道入り口

駐車場

トイレ

神社

仏閣

●ゴミは持ち帰りましょう

●たばこの吸い殻は捨てないでください

登山道でのご注意

●ゴミは持ち帰りましょう

●たばこの吸い殻は捨てないでください

▲ここから山頂まで 1.2km



キノガサタケ (衣笠茸)
スッポンタケ科



コクラン (黒蘭)
ラン科



タマゴタケ (卵茸)
テングタケ科

吉原(よしはら)登山口の駐車台数: 10台、八並東登山口の駐車場は無い

活動データ

🕒 タイム 🚶 距離 ⬆️ 上り ⬇️ 下り
04:54 **7.3 km** **555 m** **555 m**



許斐山登山道周辺地図





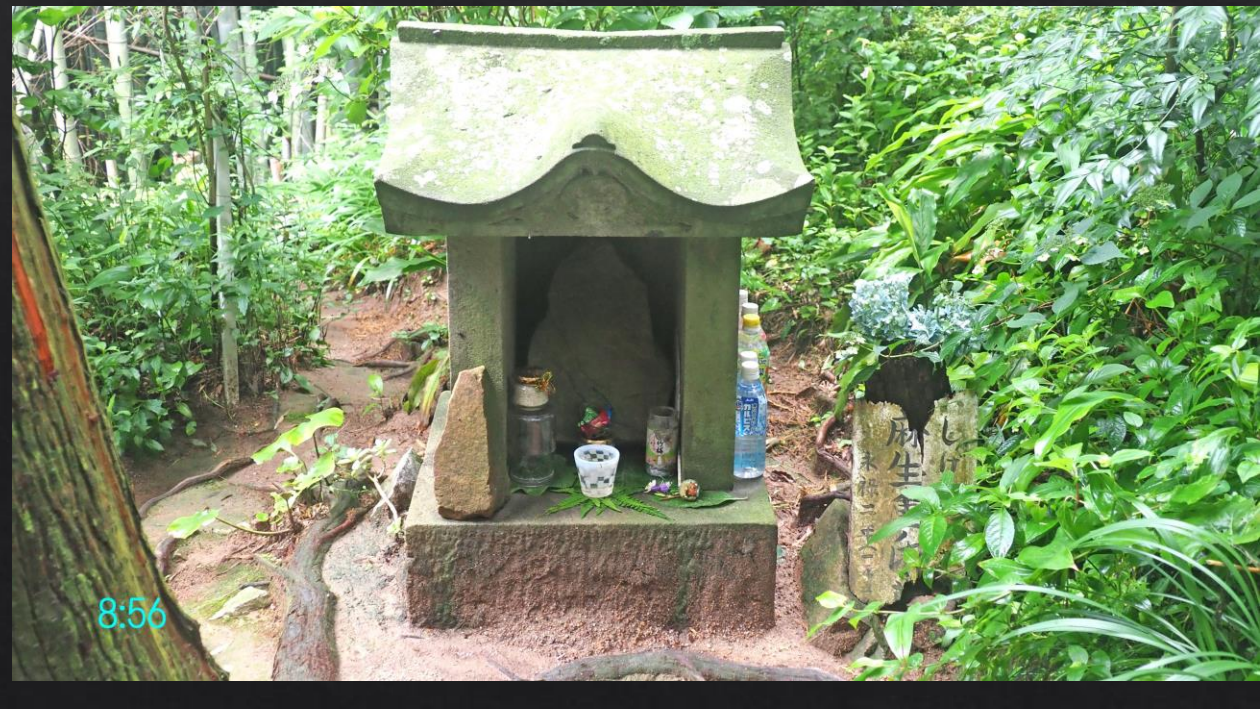
8:35 吉原（よしはら）登山口



8:37



8:54



8:56





9:35



9:39



9:42
許斐山 (このみやま) 271m



9:42



9:43

山連塚四像宗

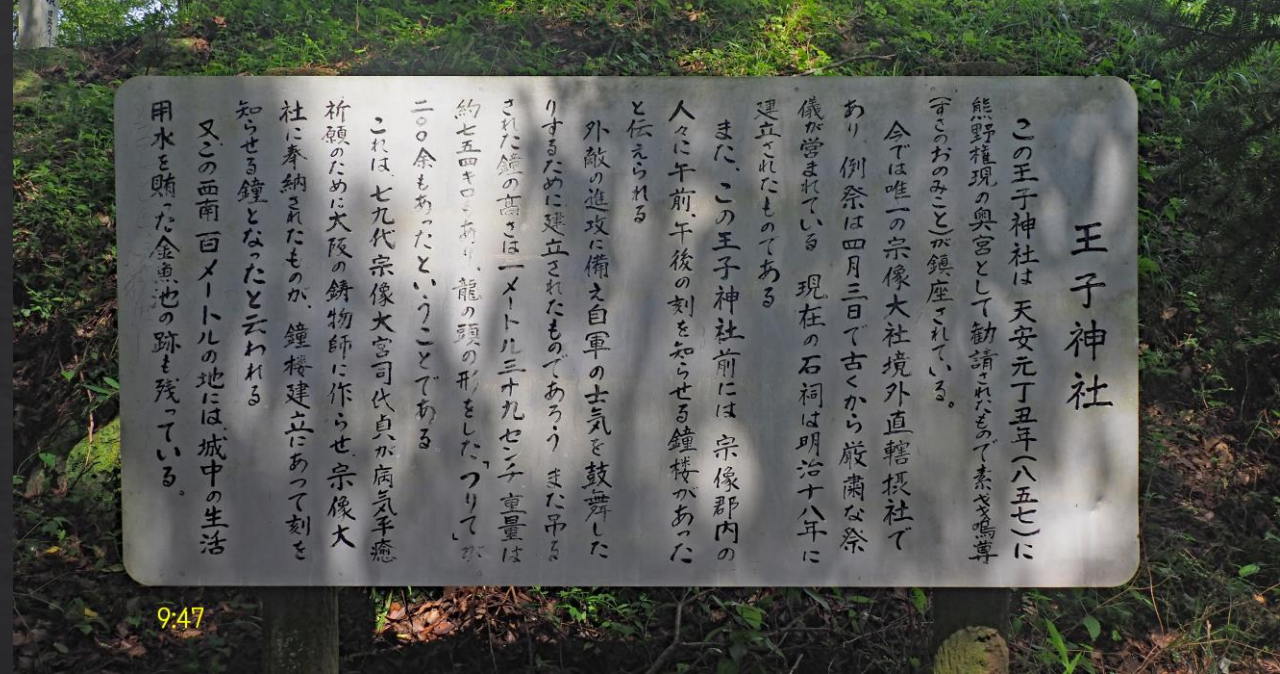
湯川山 (ゆがわさん) 471m 孔大寺山 (こだいじさん) 499m

金山 (かなやま) 317m 城山 (じょうやま) 273m

9:43

許斐山 (このみやま) 271m

2020/07/11 9:46



9:47



9:48 許斐山 (このみやま) 271m



9:49 許斐山 (このみやま) 271m

山連塚四像宗



9:55

このみ公園方面に下る



9:56

許斐城馬場



9:59

大岩







11:35





12:16
八並東 (やつなみひがし)
登山口に到着

許斐山 (271m)
八並東・登山口



12:24 八並公民館



13:09

許斐山
Mt. Konomi 山頂 1.8 km



13:10 許斐山 (このみやま) 271 m



13:28 吉原（よしはら）登山口に戻る

4時間50分の行動時間

登山中に見た花々など



ヤブミョウガ (藪茗荷)
ツユクサ科



ウバユリ (姥百合)
ユリ科



ヒメヒオウギズイセン
(姫檜扇水仙)
アヤメ科

斑入り

マムシグサ (蝮草) サトイモ科

マムシグサ

斑無し

マムシグサ (蝮草) サトイモ科

ヤブコウジ (藪柑子)
ヤブコウジ科 落葉小低木
別名：十両



ジャノヒゲ (蛇の髭) ユリ科



キノガサタケ (衣笠茸)
スッポンタケ科

キノガサタケ

生態

梅雨時期および秋に、特に竹林を好んで発生することで知られるが、まれに広葉樹の林内にも発生する。子実体の基部から伸びる根状菌糸束は、しばしば枯れた竹の稈やぼろぼろに腐朽した広葉樹の材片などにつながっており、腐生菌であるのは確かである。他の腐生菌によって、基質がある程度分解された後に侵入する二次的腐生菌である可能性がある。

多くのキノコと異なり、本種の胞子の分散は風によらず、昆虫や陸棲貝類などの小動物によるところが大きいとされ、胞子を含む粘液が放つ異臭は、それらの小動物を引き寄せるべく進化した結果であると考えられている。日本ではタテハチョウ・シテムシ・ナメクジなどがキノガサタケの胞子塊を舐めたり、托や菌網をかじったりすることが知られている^[1]。また、キノガサタケの胞子塊そのものに直接に触れることはまれであるにもかかわらず、ショウジョウバエ類では一匹あたり35000～240000個、イエバエの類では同じく1700000個の胞子が、胃の内容物として検出された例がある 当然ながら、降雨による胞子分散もあり得る。

利用

中国では、子実体基部の「つぼ」を除去し、さらに粘液化した基本体を洗い流して乾燥させ、スポンジ状の托とレース状の菌網とを食用にしている。広東料理や雲南料理でしばしば使われ、スープの具材としたり、中空の托の内部に詰め物を入れ、蒸し物に用いたりする。(出典:ウィキペディア)



コクラン (黒蘭)
ラン科



コクラン (黒蘭)
ラン科

コクラン

特徴

コクラン(*Liparis nervosa* (Thunb.) Lindl.)は、単子葉植物ラン科クモキリソウ属の多年草で、地上にはえる。細長い偽球茎が独特であるが、花も小さく、地味なランである。

偽球茎は多肉質、緑色で、細長い円筒形をしており、大部分が地表から上にあって普通は直立する。その姿は独特であり、他にあまり似たものがない。年に一本ずつが出るが数本が並んで見られる。常緑性で葉は二年にわたって残る。

葉の基部は葉鞘となって偽球茎を包み、葉身は茎の先端に2-3枚程度がつき、楕円形でやや歪み左右非対称となる。先端はとがり、葉面は柔らかく葉脈に沿って溝状にくぼむ。この葉は互生であるが、偽球茎の先端に互いに接近してつくので、対生しているようにも見える。ただし、スズムシソウなどのように本当に対生に見えるほどではなく、やや大きさも異なり、三枚出ること多い。


花茎は葉の間から立ち上がり、高さ30cm程になり、3-10程の花が総状につく。花は差し渡しが1cm足らず、全体に紫褐色で少しつやがある。側花弁は細くて反り返り、唇弁は丸っぽくて中央が前に突き出す。まれに緑の花を咲かせるものがある。果実は先が太い棒状で立つ。

生育環境など

生育環境など低山の常緑樹林内に生える。ある程度以上茂った薄暗いところで見かけ林縁などにもあるが、明るいところには出ない。海岸近くでも森林内であればほぼよく見かける。(出典:ウィキペディア)



コ克蘭（黒蘭） ラン科



カラタチバナ（唐橘） サクラソウ科
別名：ヒョクリョウ（百両）



ヤブミョウガ (薺茗荷)
ツユクサ科



ハナミョウガ (花茗荷)
ミョウガ科



ヤブミョウガ（藪茗荷） ツユクサ科



ホウチャクソウ (宝鐸草)
ユリ科



ムサシアブミ (武蔵鐙)
サトイモ科



タマゴタケ (卵茸)
テングタケ科



タマゴタケ (卵茸)
テングタケ科

タマゴダケ

生態

夏から秋にかけて、広葉樹(ブナ科・カバノキ科)および針葉樹(マツ科)の林内、あるいはこれらの混交林に孤生ないし点々と群生する。上記の樹木の細根の細胞間隙に菌糸を侵入させて外生菌根を形成し、一種の共生生活を営んでいると考えられる。南半球ではフタバガキ科の樹木に外生菌根を形成しているという。

食・毒性

鮮やかな色調を有することから、日本では有毒キノコのように誤解されがちだが、実は無毒であり優秀な食用キノコとして人気がある。キノコ自体壊れやすいため、一般にはほとんど流通していない。茹でると煮汁に黄色い色素が出るため、色を楽しむには茹でずに焼いた方がいい。味は強いうま味があり、フライや炊き込みご飯、オムレツなどによく合う。殻を破る前の幼菌は生食されることもある。

現在、信州大学で栽培に向けた研究が進められている。



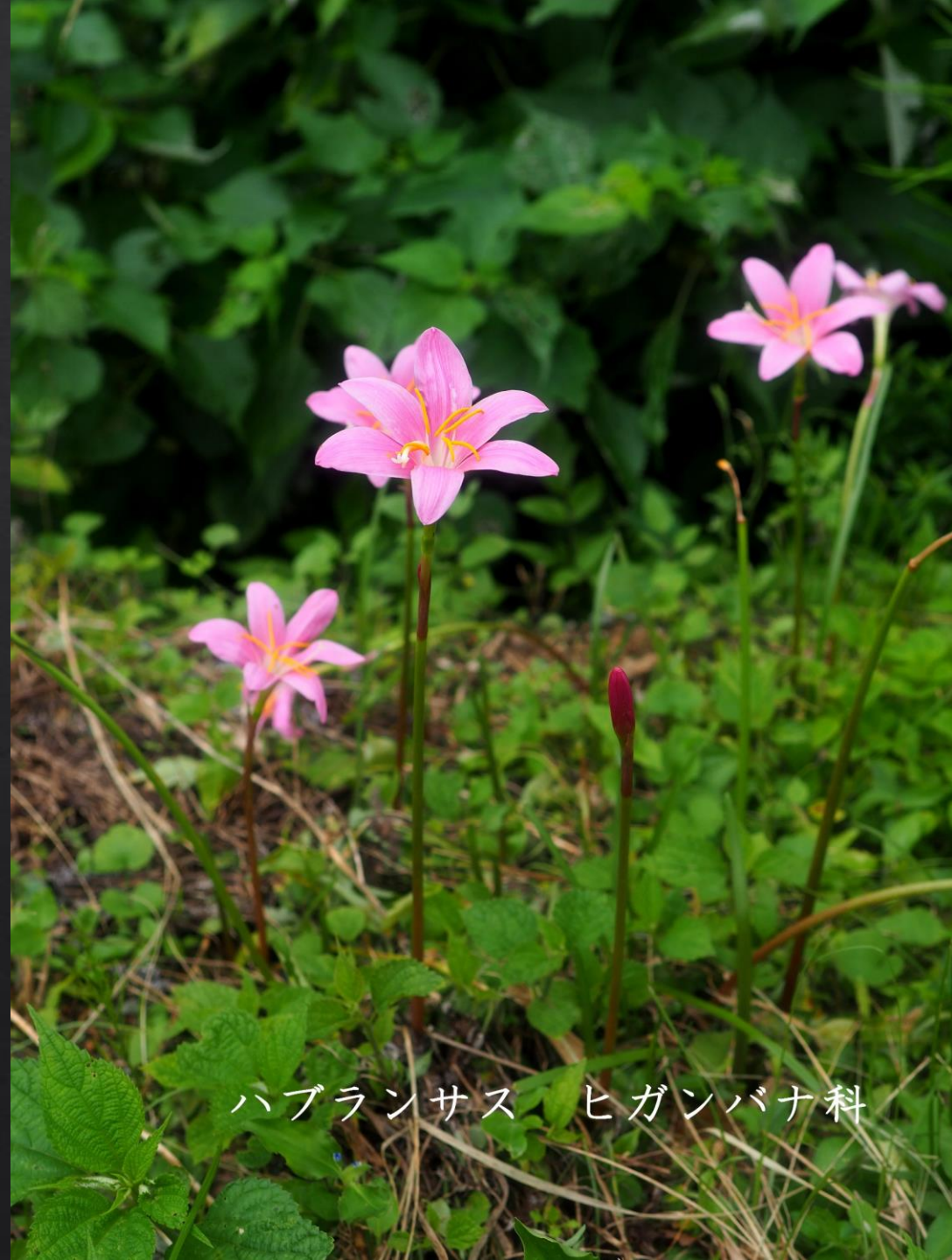
ヤブラン (藪蘭)
キジカクシ科



ヒマワリ (向日葵)
キク科



コスモス (秋桜)
キク科



ハブランサス ヒガンバナ科



カンナ
カンナ科



ヤブカンゾウ
(藪萱草)
ユリ科



ハルシャギク (春車菊)
キク科

不明



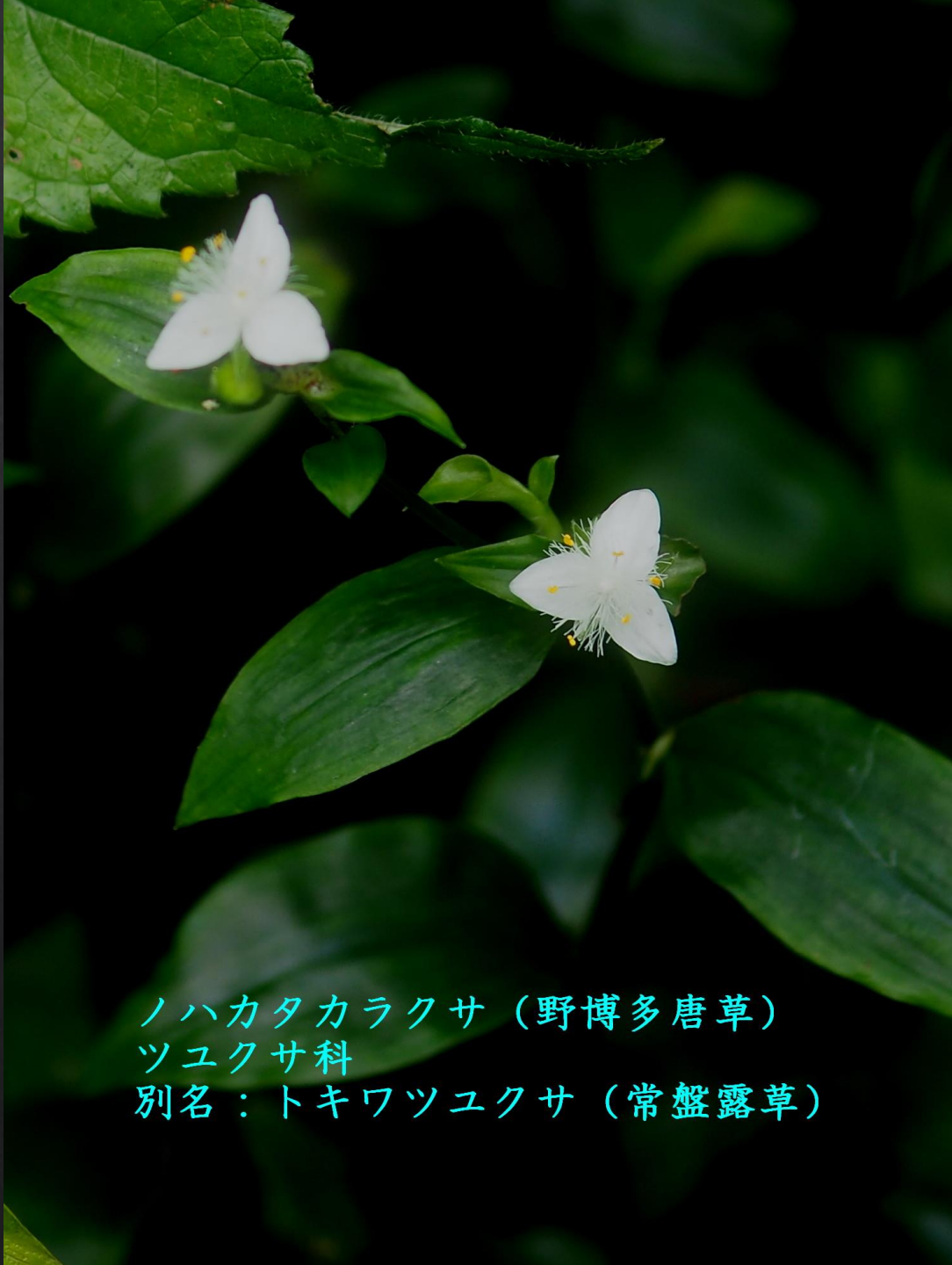
バーベナ・タピアン
クマツヅラ科



バーベナ・タピアン
クマツヅラ科



ミソハギ (襖萩)
ミソハギ科



ノハカタカラクサ (野博多唐草)
ツユクサ科
別名：トキワツユクサ (常盤露草)



オオシオカラトンボ

モンシロチョウ（紋白蝶）
シロチョウ科



ヤナギハナガサ（柳花笠）
クマツヅラ科











END